

ゴールデンウィークといったところで、どこで何をした、という覚えがあるわけではない。しかし終わってしまうと、夏休みまで当分、長い休みがないわけで、適度な不良高校生であることを心がけている僕としては、どうも気がのらない毎日が続くことになる。

そんなわけで、金曜の夕方なれど、麻雀<sup>ジャン</sup>荘へ行こうだの、茶店<sup>サテン</sup>で不良有名女子高生をナンパしようだのと誘う、御学友をふりきった僕は、地下鉄を広尾で降り、六本木に出る連中にバイバイをした。

明るい陽ざしの中をぶらぶらと我が家に向けて歩いていく。

都立中程度高校の二年生としては、そろそろ大学受験が、壊れかけのラジコン飛行機のよう、頭の中をぶんぶん飛び回ってはいる。もつとも、一流商社やら最先端マスコミ関係に強い興味と憧れ<sup>あこが</sup>を抱いているわけではないからして、己れに見合ったランクの大学に行くことができれば、まあ、そこそこの幸せというわけだ。

思うに、僕がこんなしまりのない学生生活を送るようになったのは、我が父、冴木涼介<sup>さいきりょうすけ</sup>の、どうもならんモアツとした性格に起因しているのではないだろうか。

だいたいが父親のくせに息子への教育義務を感じているとは思えない輩<sup>やから</sup>だ。いや、社会人

としての義務感を抱いているかどうかすら怪しい。

普通、高校生ともなれば、自分の父親の商売が何で、先行きにどれほどの可能性を持ち、経済力がいかほどであるか把握しているのは、ジョーシキである。

それが僕にはない。

断じて僕の責任ではない。

どうも親父の涼介は、僕を息子ではなく、単なる同居人だと考えている節<sup>せま</sup>がある。

そう思い始めたのが、我が小学校四年生の折り。それ以来の「家族不信」が僕にはある。ところが、その家族が、親父以外、僕にはいないのだ。

母親は、死別、ということになっっている。証拠はない。父、涼介の言葉だけだ。

逃げられたのではないか——しばしば思うことだ。僕にはまったく、母親の記憶がない。写真すら我が家には残っていない。

第一、ものごころついた頃から、我が家には、僕以外誰<sup>だれ</sup>かがいた、という例<sup>たあ</sup>しがない。

僕が中学二年のときに、親父はそれまでの勤めをやめた。それが何であったか、正直いって、僕はよく知らない。

その頃、本人に仕事を訊<sup>き</sup>いても、まともな返事が返ってきたことはなかった。訊くたびに返事がちがう。

いわく、

「商社マン」

「フリーのルポライター」

「オイルビジネスマン」

「シナリオライター」

「行動人」

あげくの果ては、

「秘密諜報員」ときた。

がつくりきた。チョーホーイン。何と古めかしい言葉だろうね。せめて、エージェントとか、いいようがあるだろうに。

そのとき、僕は思った。

（ああ、俺の親父は典型的な社会不適合者だ）

こうした場合、ひとりきりの時間が多い子供の成長過程は決まっている。

先輩の不良学生↓ボーソー族の集会参加↓ソリコミ、ツツパリ↓退学↓極道。

または、

ひとりきり↓テレビ熱中↓パソコン↓アニメ↓典型的ネクラ。

そのどちらにもならず、適度な不良性を維持している僕は、何と立派な若者ではないか。

スポーツも愛し、勉学も適度に励む。クラブ活動こそ、先輩との折りあいが悪くて（早い

話、ボクシング部なのだけれど、下級生が上級生より強くてはまずいのね。二流の都立高校にも、こうした社会の縮図はあるわけよ）、やめてしまったけれど、まあそこそこには明るく、健全に生きているわけだ。

べったんに潰した鞆を背中にしよって、たらたらと歩いているうちに、僕は、住居である、広尾サンタテレサアパートメントに辿りついた。

長たらしい名前の「サンタテレサ」というのは、架空の地名。大家であり、一階でカフェテラス『麻呂宇』を経営する圭子ママの趣味で名付けられた。

ただし、サンタテレサアパートメントは、僕も気に入っている。三年前に、資産家である夫に先だたれた圭子ママがその屋敷跡に建てた代物だ。設計は、アメリカ人の建築デザイナーが担当したとかで、建物には、日本ばなれしたバタ臭い雰囲気は漂っている。

十階建て、一階四部屋の各室は、すべてが洋式の間どり、早い話が靴を脱がなくても部屋に上がってしまうのだ。

今はこうしたタイプが超人気とかで、空室待ちの横文字商売人が、不動産屋のリストに載るくらいいるらしい。彼らは、コピーライターだのイラストレーター、スタイリストだの、収入の途もばっちり開け、多少家賃が高かろうと、サンタテレサアパートに住むのを、ひとつのステイタスと見なしているそうだ。

ところが、三年前、できた当初からの店子である我が家は、家賃滞納常習犯とはいわぬま

でも、特別優待店子で、家賃も他の入居者の半額、しかも『麻呂宇』での飲み食いがある、あるとき払いの催促なしでツケがきく、という優遇ぶりである。

その理由はふたつ。

三年前、それまでの、何だか知らないが社会に寄与していたとはまったく疑わしい仕事をやめた親父が始めた、新商売が理由その一。

サンタテレサアパートメントの二階『麻呂宇』の洒落た天幕テラスの上に、これだけは値をかけた、筆記体のネオンサイン。

#### SAKI INVESTIGATION

インヴェステイションの意味がわからない間抜けが、ときおり、エアロピクス教室だの、アスレチックジムだのとまちがえてやって来る。

つまり探偵事務所。

三DKの、八畳洋間が親父の事務所になっている。残るふたつの六畳が、親子が分けあう生活空間。

『麻呂宇』のママは、ミステリー、それもハードボイルドマニアで、どうしても店子に私立探偵プライベートが欲しかったというわけだ。

理由その二は、父、涼介にある。息子の僕からいつては何だが、正確破綻はた者の割に、これが見てくれだけは悪くない。

この続きは、書籍でお楽しみください。

#### ◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。